

## 第九章 子供不在が語るもの 『門』

### 一、宗助の挫折

『門』(『東京朝日新聞』および『大阪朝日新聞』、明治43年3月1日～同年6月12日)という小説を、単に「理想主義的な夫婦愛」(注1)を描いた小説として読むことははやできないだろう。社会とは距離をおきながらお互いだけを頼りに生きている夫婦を描いているため長い間「一つの有機体」神話から自由でなかったが、『門』はむしろ社会の掟を壊してまで結ばれた二人の男女の「それから」が、至高の幸福な状態ではなかったことを描いている小説と見るべきである(注2)。

それを見るためにまず宗助の隠された欲望をみることにしよう。それは、まずは成人男性が一般的に期待する「仕事」上の成功に求めることができるだろう。これに関してはまた後述するが、既に様々な言葉で指摘済み(注3)のことでもある。ところが、もう一つの欲望、結婚した男性がやはり一般に求めるであろう「子供」に関する欲望が宗助に強いことは今までほとんど注目されてこなかった。

宗助の「子供」に対する欲望は、冒頭に近いところで「達磨」の風船を買って帰る場面においてすでに現れている。宗助は散歩の途中、本屋や時計屋、傘屋、西洋小物屋、呉服店などの前に立ち止まるが、中に入って手にとって見ようとはしない。御米のために「半襟」を買う気を起こしながらもすぐにそれらを買うことは「五、六年前の事」と否定されてしまうのである。

そのような宗助がこの散歩の末に買って帰るものは子供用の玩具「護謨風船の達磨」だった。それはむしろまずは経済的余裕のない宗助にも気軽に買えるものだからだろうが、それでも、子供がいない家庭に子供用の玩具を持ち込む宗助の行為は尋常なものとは言えない。宗助がものを買わないのは、経済的能力の有無以前に「中へ這入ると必ず何か欲しくなったりするのは宗助自身によって既に「一昔前の生活」と説明されるように、宗助の現在は欲望さえも希薄な無気力なものなのだから。そういう意味では、宗助が達磨の「風船」を買うのは明らかに、まだ存在しない「子供」への欲望の現れと見ていい。

実際、家では食事の時宗助が買ってきたものを見せ、膨らませた達磨が落ちて「覆らな」いを見て御米は「女だけに声を出して笑つ」ても弟の小六は反応がなく、御米は「兄さんも随分呑気ね」と「半ば夫を弁護する様に云」(三の二)わねばならないはめになる。

「風船」は、その場にそぐわないものだったのである。そのため、食事が終わってからも女中の清は「勝手の方で」そのことを「しきりに笑」っている。御米の説明によると「子供もない癖に」「あんな玩具を買って来て、面白さうに指の先へ乗せていらつしやるから」(三の三)なのである。その時の宗助の反応は次のようなものだった。

宗助は意にも留めない様に、軽く「さうか」と云つたが、後から緩つくり、「是でも元は子供が有つたんだがね」と、さも自分で自分の言葉を味はつてゐる風に付け足して、生温い目を挙げて細君を見た。御米はぴたりと黙つてしまつた。(三の三)

「元は子供があつた」との、「自分で自分の言葉を味は」いながらの宗助の自己確認の言葉は、宗助が、しかるべき自己像を抱いていることを示す。そのような宗助に「子供」への欲望を見るのは無理なことではないはずだ。そして以後も宗助のそのような欲望はいたるところで散見される。

たとえば「佐伯の叔母」の若さが話題にのぼった時も宗助は「若い筈だ、あの年になる迄、子供をたつた一人しか生まないんだから」(五の一)と「子供」にひきつけて説明するのであり、御米が具合を悪くした時はすぐに「子供が出来たんぢやないか」(六)と聞いている。宗助は子供の誕生に関して三度失敗しているのだが、「子供」を諦めてはいないのである。

また宗助は坂井家で人形の「夜具」が干されているところを見ては「しばらく立つて眺めて」(九の四)しまつていて、家の中に入ってから宗助に強く印象付けられるのは「子供の数が何人あるか分からない様に思はれ」る子供たちの姿であり、その賑やかな雰囲気である。子供たちの遊びは「凡てが宗助には陽気で珍しく聞え」(九) 実際に宗助は坂井に「大変御賑やかで結構です」(九)との挨拶を述べてもいる。

坂井家から帰ってから坂井家の「陽気で、賑やかな模様」(十三)が話題になった時も宗助は「何金があるばかりぢやない。一つは子供が多いからさ。子供さへあれば大抵貧乏な家でも陽気になるものだ」と、「御米を覚」(十三)さないではいられない。

其云ひ方が、自分たちの淋しい生涯を、多少自ら窺める様な苦い調子を、御米の耳に伝へたので、御米は覚へず膝の上の反物から手を放して夫の顔を見た。宗助は坂井から取つて来た品が、御米の嗜好に合つたので、久しぶりに細君を喜ばせて遣つた自覚があ

るばかりだつたから、別段そこには気が付かなかつた。御米も一寸宗助の顔を見たなり其時は何にも云はなかつた。けれども夜に入つて寐る時間が来る迄御米はそれをわざと延ばして置いたのである。

二人は何時もの通り十時過床に入つたが、夫の眼がまだ覚めてゐる頃を見計らつて、御米は宗助の方を向いて話しかけた。

「貴方先刻子供がないと淋しくつて不可ないと仰しやつてね。」(略)

「何も宅の事を云つたのぢやないよ」

此返事を受けた御米は、しばらく黙つて居た。やがて、

「でも宅の事を始終淋しいへと思つてゐらつしやるから、必竟あんな事を仰しやるんでせう」と前と略似た様な問を繰り返した。宗助は固よりさうだと答へなければならぬ或物を頭の中に有つていた。けれども御米を憚つて、それ程明白地な自白を敢てし得なかつた。此病気上りの細君の心を休める為には、却つてそれを冗談にして笑つて仕舞ふ方が善からうと考へたので、

「淋しいと云へば、そりや淋しくないでもないがね」と調子を易へて成るべく陽気に出たが、其処で詰つたぎり、新らしい文句も、面白い言葉も容易に思ひつけなかつた。  
(十三の四)

宗助は御米に配慮しつつも、「子供」のことをあえて話題にし、しかも「自分たちの淋しい生涯を、多少自ら寤めるやうな苦い調子」で言わずにはいられない。御米の追及に対しても宗助は「固よりさうだと答へなければならぬ或る物を頭の中に有つてい」るのだから、御米が気づいた「苦い調子」はあながち気のせいではないのである。

そういう意味では宗助が「宅のことを始終淋しいへと思つて居る」というのは御米の見当ちがいではなさそうだ。少なくとも子供の数一存在において宗助は坂井を強く意識しており、「元は子供があつた」とする自己認識は「坂井は宗助のなるべかりし人物」(注4)という認識へとつながっていくだろう。

坂井と宗助を「閑静な屋敷町と安普請の借家」といった「空間」から「ゆたかな先住者と新来の生活者」の対比と見たのは前田愛だったが(注5)宗助は経済的な差異だけでなく子供をめぐる差異も強く意識していた。宗助は一見ひっそりとした暮らしの「淋しさ」を楽しんでいるかのように見えるが、ひそかに「賑やかさ」を求めていたのである

## 二、「近代家族」の失敗

宗助にとって「子供」とは家庭における「成功」を象徴するものであった。そして、御米にとっての子供とは何よりも「妻」としての義務をまっとうさせてくれる存在として認識されている。だからこそ上記の文章に引き続いて御米は子供が出来ないと言われたことを宗助に告白しながら「貴方に御気の毒で」「謝罪まらう謝罪まらうと思つてみた」(十三)と言っているのである。

御米は実際さうかも知れないと思つた。さうして斯う云はれた後では、折々そつと六畳へ這入つて、自分の顔を鏡に映して見た。其時は何だか自分の頬が見る度に瘠けて行く様な気がした。御米には自分と子供とを連想して考へる程辛い事はなかつたのである。裏の家主の宅に、小さい子供が大勢ゐて、夫が崖の上の庭へ出て、ブランコへ乗つたり、鬼ごつこを遣つたりして騒ぐ声が、能く聞えると、御米は何時でも、果敢ない様な、恨めしい様な心持になつた。今自分の前に坐つてゐる叔母は、たつた一人の男の子を生んで、その男の子が順当に育つて、立派な学士になつたればこそ、叔父が死んだ今日でも、何不足のない顔をして、腮などは二重に見える位に豊なのである。御母さんは肥つてるから剣呑だ、気を付けないと卒中で遣られるかも知れないと、安之助が始終心配するさうだけれども、御米から云はせると、心配する安之助も、心配される叔母も、共に幸福を享け合つてゐるものどしか思はれなかつた。(五の一)

御米にとって「辛い」のは「自分と子供とを連想して考へる」ことである。つまり御米の意識は「子供」自体よりもむしろ「産めない私」という事柄にある。だからこそ「裏の家主の宅に、小さな子供が大勢居て、それが崖の上の庭へ出て、ブランコへ乗つたり、鬼ごつこを遣つたりして騒ぐ声が、能く聞こへる」と、御米は「何時でも」「果敢ない」だけでなく「恨めしい」気持ちになるのである。御米の「恨めしさ」-嫉妬は明らかに坂井婦人に向かう、「女」あるいは「妻」としての競争意識であり、御米にとって子供の不在という現象は宗助のように家の「淋し」さ以前に自己の存在意味自体を問われるものだったのである。

自分の顔が「見る度に瘠けて行く」のに反して、叔母の「顎」は「二重に見える位に豊か」と考えるような感じ方も自分と叔母をまず「産む性」と規定したからこそ可能なもので

ある。その息子にとっては、「卒中」といったような、病気＝（不幸）の危険な兆候でしかない「肥つてる」ことさえも御米にとっては「豊か」さを表す「幸福」の象徴以外の何物でもない。そして夫が死んだ後でも叔母が「何不足のない顔をし」ていられるのは一人息子がいて「順当に育つて、立派な学士になつたればこそ」と考えることには、自己の将来を保証してくれる投資源としての子供観が現れている（注6）。御米が叔母に見ているのは妻としての義務を果たし、母としての権利を享受している女の姿なのである。

このようなお米の感性は、いわゆる「近代家族」（注7）観を内面化した結果のものといえるだろう。小林嘉宏は明治末年から大正期において給与生活者を中心とする「新中間階層」において「子供」にたいする関心が急激に高まり、「核家族化した」家族・家庭生活社会階級が成立」（「大正期「新中間階層」の家庭生活における「子供の教育」、『日本家族史論集10 教育と扶養』、2003・2）したとしている。「家」ではない「家庭」の概念は「子供」の存在を前提としており、そのような時代のなかでは御米と宗助の「家庭」は「近代家族」たりえないのである。

そうしてみると、小六の同居は本来ならば「子供」の場所であったはずのところへの前近代家族制の侵犯でもあったことが分かる。つまり、宗助のところになんか新しく作られた「家族」の形は「近代」にふさわしくない（と思われた）「前近代的家族」の形だったのである。本来ならば宗助と御米の「子供」が入るべき空間 家中で「一番暖かい部屋」（九）に、戸主の弟 前近代家族ならば自然な構成員であったはずの 小六が入って以来、その不自然さは心と身体の葛藤を招来する。

御米が二人きりの食事中に話題を探す苦勞をせねばならないのも小六が同居してはいても儀礼の要らない家族親密圏の外側の人間であることを示すものである。小六もまた「茶の間へ出て嫂と話すのは猶厭であつた」（十）。そしてそのような雰囲気「居たたまれなくなる」からこそ小六はとかく外出をし、お酒を飲んでいたのである。小六が昼間から酒を飲んで「あまり顔を赤くして帰つて来られるのが不安」（十）だというような御米の恐怖も小六が「安心」を与えるような「家族」ではなかったことを示すものであり、それだけに小六にとっても兄宅での同居は苦痛だったはずである。小六の同居以後、小六の部屋はとかく「ひつそりして人のあ様にも思はれな」（九）ような状況にあるのだが、そこに流れる静寂は侵犯された側だけでなく侵犯した側にとってもその同居が当時において不自然なものだったことを雄弁に語る。そしてそういう意味では小六の同居が宗助と御米の「安定した構造」を「軋」ませるような、「無意識の領域への侵犯」（注8）だったと見るのは

正しい。

ただし、お米の病気は「秩序と均衡が失われた住まいの空間の身体的な暗喩」ではあるにしろ、小六が「兄夫婦の仲を不義と思っている世間の一員」(注9)だから生じたわけではない。たとえ小六が二人のことを認めていたとしても、小六が宗助と御米が作ろうとした「近代家族」の成員ではありえないのだから「軋み」は避けられなかったであろう。

それだけでなく、御米は「子供」という存在に将来の安定を託しているのだが、子供の代わりになった小六の存在はむしろ御米にとっては将来の安定を脅かす存在でもある。

明治三十一年に制定された新明治民法が「戸主」制を定めており、このことが家父長制を補強する装置として働いていたことは周知のとおりである。戸主は「家父長」としての様々な権力を持っていたが、同時に家族を扶養する義務を持っていた。「戸主」宗助の弟である小六は、男系主義にして男性を優先させていた当時の民法下では御米よりも家督相続において優先されたはずである。妻は家督相続において「直系卑族」(＝つまり子供)がない場合「一位」になれるのは「家付きの妻」であった限りにおいてであり、「嫁入った妻であれば夫の兄弟姉妹の下位に立つ」(注10)ような状況にあったのだから。駆け落ち同然の御米は当然ながら「家付きの妻」などではなく、子供もいない限り小六は御米にとって脅威の存在でしかなかったはずなのである。

### 三．懷疑と断罪

一見御米をいたわるように見えながらもことあるごとに「子供」の話をする事で御米を抑圧する夫の元で、御米が「子供」の代わりに小姑を抱え込むようになって「ヒステリ - 」になったとしても不思議はない。一方の宗助はすでに物語の冒頭から「神経衰弱」を訴えていた。「文字」に対して違和感を感じるようになって「矢つ張り神経衰弱の所為かも知れない」と語っていた宗助の「神経衰弱」は以後も繰り返し語られるようになる。

たとえば、小六の学費の問題が生じて叔母と会って話す時も、宗助は自分の親が残した屋敷を売り払った残りのお金もなくなり自分たちの財産も息子の事業につき込んでしまって「一文無し同然」という、宗助にとっては不都合な話を聞いてもうまく対応することが出来ない。宗助は叔母の説明を聞いても「ぼんやりして兎角の返事が容易に出な」いだけでなく、そのことを自分で「心のなかで、是は神経衰弱の結果、昔のやうに機敏で明快な判断を、すぐ作り上げる頭が失くなつた証拠だらうと自覚」(四)してもいる。そして、宗助

が参禅に行った目的は、「心の実質」を「太く」(十七)するためであった。「衰弱」した「神経」「心」を、強く太くするための参禅だったのである。参禅をもって「腰弁」には似合わないものとし、作品の「分裂」が取り沙汰されたのは、宗助の「神経衰弱」病気が看過されたためと言っていい。以前からの心の病気が安井の出現をきっかけに高じ、「弱くて、落ちつかなくて、不安で、不定で、度胸がなさ過ぎて希知」(十七)になった「心」を治すために宗助はお寺を訪れたのである。そういう意味ではテキストの「分裂はない」(注11)。

しかし、安井と知り合う頃の宗助はまだ「服装にも、動作にも、思想にも、悉く才人の面影を漲らして、昂い首を世間に擡げ筒、行かうと思ふ辺りを闊歩」するような青年で、「頭は華奢な世間向き」で「生まれ付き理解の好」い「楽道家として、若い世をのびのびと渡つた」「人を不愉快にするほど深刻な表情を示し得た試しがな」(十四)い青年であった。そして「不景気な顔さへしなれば、何処へ行つたつて歓迎されるもんだ」というぐらいの処世術も身につけていた。「昔」の宗助は、他者に「歓迎」される秘訣を心得ていて、対人関係においても自信に満ちていたのである。それだけでなく宗助は「生まれ付き頭の好い男」として、勉強に熱心な方ではなかったが「未来」を「虹」色と見、「洋々の二字」が自分の「前途に棚引いて居る気」がして、実際に「卒業後の自分に対する謀を忽かせにしな」(十四)い青年であった。「父の紹介」やその「知人」の紹介を頼って「自分の将来に影響し得るやうな人を物色」して「訪問」を試みたりするなど、就職運動も疎かにはしない青年だったのである。宗助が大学を途中で退学せず、順調に家族や知人の助けをかりて就職していたなら、彼の予測通り「洋々」な「前途」が開かれるのも不可能な事ではなかったであろう。宗助は「相当の資産のある東京ものの子弟として、彼らに共通な派手な嗜好を学生時代には遠慮なく満たした男」(十四)で、洋服の「襟」は「白」く、「洋袴のすそ」は「奇麗に折り返されて」いて、「靴足袋」には「模様入のカシミヤ」を愛用するような豊かな時代を送って来た。

しかし今の宗助は、役所の下級官吏となって「腰弁」(一)と自嘲せねばならない存在となっている。仕事に出かける通勤の道は宗助にとって「体と頭に楽がない」もので、「日曜以外の出入りには、落ちついてゐられない」。「毎朝例刻に先を争つて席を奪ひ合いながら、丸の内方面へ向ふ」様子を宗助は「殺風景」で「人間的な優しい心持ちの起つた試しは未だかつてない」と考えている。役所での仕事に費やされる六日半は「非精神的」で「詰まらなく」「暗い」「精神作用」と認識されていて宗助にとっては一週間に一度の日曜日こそ

が「貴い」ものなのである。

宗助の姿は、特別「新しい希望もな」(十三)いままに近代産業社会という組織の中で「淘汰」(二十三)を恐れながら生きている、近代産業社会を支えるサラリーマンの典型的な姿といえるだろう。今や宗助は「洋々」な「前途」どころか、結婚して六年経っても、自分の靴を新調する余裕さえ持てずに「底に小さな穴」がある靴をはいて雨の中を出勤せねばならないような状況に陥っている。そして父の形見である屏風を売り払うまでの状況に追い込まれているのである。

それに比べて宗助のいとこ安之助は新しい事業を起こし、「有望な前途」(十)が見えている青年として「有福な生計をして居」て「女学館」出で「器量」は「好い方」の女性との縁談を持ちかけられている。御米と違って「兄弟が沢山ある」「余程派手な家」の出身の娘との結婚—それは御米とのことさえなかったならばあり得た、もう一つの宗助の姿であったはずだ。

安之助が宗助に自己の「あり得た過去」の姿を見せつけているとすれば「あり得た今」を見せつけているのは家主の坂井である。「血色の好い顔」の坂井は、立派な屋敷、血統の良さそうな犬、ブランコのついた庭、かわいい子供たち、さらに狩りに出掛けられるような経済的豊かさと時間まで所有して(七)「余裕」に満ちた生活ぶりを見せている。宗助が坂井に会いながらも会社へ行く時間を気にせねばならない「腰弁」であるのとは大きな落差を見せているのである。

自分を「失敗者」(四)と認識している宗助は歯医者へ行って雑誌「成功」を手にしても「一か条を読んで、それなり雑誌を伏せ」てしまい、「成効と宗助は非常に縁の遠いものであつた」と考える。そのような「失敗者」としての自己認識を新たにせざるを得なかった事件が弟小六の学費問題であったはずだ。小六の学費問題は、宗助が自己の家父長としての無力を改めて認識させた事件だったのである。「人間一人大学を卒業させるなんて、己の手際ぢやとても駄目」(四)という宗助の自己認識には深い絶望がある。

問題は、宗助が、このような現在をもたらした「昔」の自己の選択に関して懐疑しているということである。

幸にして小六は其後一度もやつて来ない。此青年は、至つて凝り性の神経質で、斯うと思ふと何処迄も進んで来る所が、書生時代の宗助によく似てゐる代りに、不図気が変わると、昨日の事は丸で忘れた様に引つ繰り返つて、けろりとした顔をしてゐる。其処も



兄弟丈あつて、昔の宗助に其儘である。それから、頭脳が比較的明瞭で、理路に感情を注ぎ込むのか、又は感情に理窟の枠を張るのか、何方か分らないが、兎に角物に筋道を付けないと承知しないし、また一返筋道が付くと、其筋道を生かさなくつては置かない様に熱中したがる。其上体質の割合に精力がつゞくから、若い血気に任せて大抵の事はする。

宗助は弟を見るたびに、昔の自分が再び蘇生して、自分の眼の前に活動してゐる様な気がしてならなかつた。時には、はらへする事もあつた。又苦々しく思ふ折りもあつた。さう云ふ場合には、心のうちに、当時の自分が一閃に振舞つた苦い記憶を、出来る丈屢呼び起させるために、とくに天が小六を自分の眼の前に据ゑ付けるのではなからうかと思つた。さうして非常に恐ろしくなつた。此奴も或は己と同一の運命に陥るために生れて来たのではなからうかと考えると、今度は大いに心掛かりになつた。時によると心掛りよりは不愉快であつた。(四の二)

宗助が小六を批評する「若い血気に任せて」という表現が「熱中」への批判であることはいふまでもなく、だからこそ宗助は小六を見て「はらへ」したり「苦々しく」思はずにはいられない。「一閃に振舞つた」「当時の自分」はすでに宗助には「苦い記憶」でしかないのである。小六が自分と「同一の運命に陥る」のかと思うと、「心掛かり」の域を通り越して「不愉快」にまでなるのも、宗助が昔の自分に否定的であることを表していよう。そしてここで宗助のいう「同一の運命」なるものが、「至つて凝り性の神経質で、斯うと思ふと何処迄も進んで来る所」がもたらす不運な境遇であることは言うまでもない。

#### 四、秩序志向の異性愛

宗助の神経衰弱は、単に子供がいないことや仕事上の挫折にその理由があるのではない。むしろそのような現在を作った過去への悔恨によるものと見るべきである。つまり子供の不在としがたい仕事に追われる現在を<欠如>と感じさせるような近代的欲望は宗助をして御米とのことを後悔させているのである。

宗助の悔恨はたとえば「諦めとか、忍耐とかいふものが断へず動いて居」る生活の中で、御米が「その内には又屹度好い事があつてよ。さうさう悪い事許り続くものぢやないから」と夫を「慰める様に云ふ」と、その言葉が宗助に「真心ある妻の口を籍りて、自分を翻弄

する運命の毒舌の如くに感ぜられ」(四) することにも現れる。

問題は、そのとき宗助が「我々は、そんな好事を予期する権利のない人間ぢやないか」といい、御米の口を「噤」ませてしまうことにある。宗助たちを罪深い人間と考えているのは世間以前にむしろ宗助自身なのである。しかも宗助は死産や早産 結果として産めなかったこと責任を、まずは「産婆」にあるとしながらも「半ば以上は御米の落度に違ひな」(十三) といっているように、御米に求めている。そして御米もそのような宗助の考えを内面化して「残酷な母」との自覚を強くし「恐ろしい罪を犯した悪人と己を見做」すようになるのである。

三人目の子供を失った時の御米の心境は次のようなものだった。

御米は広島と福岡と東京に残る一つ宛の記憶の底に、動かしがたい運命の厳かな支配を認めて、其厳かな支配の下に立つ、幾月日の自分を、不思議にも同じ不幸を繰り返すべく作られた母であると観じた時、時ならぬ呪詛の声を耳の傍に聞いた。(十三の七)

しかし、御米に死産や早産を「動じ難い運命の厳かな支配と認め」させ、そこに「呪詛の声」を聞かせたがっているのは一体誰なのだろうか。あるいは、「貴方は人に対して済まない事をした覚へがある。その罪が祟つてあるから、子供は決して育たない」とする易者の声は誰の声なのだろうか。この一言に御米は「心臓を射抜かれる思」いをするのだが、そうさせているのは誰なのだろうか。

このような「呪詛」を可能にするのはまず、「女性の人生で最も大きな仕事は母親業であつて、これこそが女性にとって唯一、適切な自己表現の手段」(注12)とされてきた母性神話にほかならない。たびたび取り上げられてきた御米の「微笑」(注13)は、御米がたとえば女らしさを教え込む「教育勅語」などによってすでに「従順な身体」(フ コ)化されていることを語るが、それでも御米は「母」とならない限り完全なる「女」にはなり得ない。子供を生むという資本主義制下の「再生産」(チヨドロ『母親業の再生産』)を果たさない限り「資本制と家父長制の原理によって貫かれている」「近代家族」(注14)は作れないのである。

「母性愛」の成立は、上野千鶴子がすでに語っているようにこの時期に集中的に現れ、そのことは「近代家族」には自明とされた(注15)。宗助や御米をして子供の不在をまず母親の責任としているのはこのような近代的母性神話なのである。

そして、「母」となることが必要なのは、それが「国民」になれる道でもあったからである（注16）。御米がせめても「国民」として社会の構成員になるためには「子供」を生んで「母」となることがまず必要だったのである。

御米の焦燥は、「再生産労働」に参加できないことで「国民」になり得なかった事態ゆえの結果と見ることができる。そして御米が宗助を「お気の毒」だと感じるのは、「その労働の成果である再生産は男性、すなわち家父長によって占有されている。それが家父長制の意味である」というような状況の中で「占有」すべき「再生産物」を作ってあげられなかったことによる。その意味でも「家族とは家父長制的再生産関係を語る」（注17）のである。

上野千鶴子は、「近代はいわゆる破壊された社会、すなわち人間と自然、人間と身体の間の文化・社会的な自動的制御機構が破壊されたことから始まった社会」「禁忌が解除されることで人々は生産と再生産を最大化するよう促された」としながら「多くの子供がいる家族は「前近代的」な形ではない（明治時代の日本もまた出生率が高かった）。このような形は近代の形、すなわち発展された先進諸国によって開発された状態で抑圧されている同時代的な<近代>世界システムのひとつの姿である」（注18）とするが、御米と宗助がうらやましがっていた「この上もない賑やかさうな家庭」（七）は、まさにそのような<近代>の姿でもあったのである。

すでに明らかのように、「子供」にかかわる再生産は単に「家族」単位の事柄ではない。「母性神話」を支える「良妻賢母主義」はすでに「生めよ増やせよ」の時代の前から既に「国策」（注19）であったし、近代国家は人口政策に常に関心を払っていた。「人口政策は<近代>の国民国家成立初期からの重要な政治的課題であった」（注20）のである。

人口を増やすためには当然ながら異性愛が介されなければならない。というのも、女性が「産む」性として定義されるには対としての男性との関係が想定されねばならないからである。産む性としての母性神話と異性愛主義は無関係ではないのである。

しかし、その異性愛主義は婚外交渉　いわゆる「不倫」を排除する。婚外交渉が排除されるのはむろん一夫一婦制をささえるためだが、姦通罪が女に対してより重いものであったのは女に二人の男を許容しようとしめないシステムの問題であろう。それを手伝っているのは生まれた子供の血筋を明らかにできないといった、「血統の乱れ」に対する男性側の恐怖であるはずだ。むろんその恐怖は、家父長制が根本から覆されることへの恐怖である。

アリエスによると一夫一婦制は人間の性欲を制御するための制度だということだが（注

21) 一夫一婦制こそが婚外交渉を「不倫」と名づけ「罪」とするのである。『門』において「大風」と記される肉体的情熱が「罪」とされる背景にはこのような意識があったと見るべきである。「不倫」の禁止は<秩序>を志向する。その秩序は「国家」の「人口」を構成するものとして産業戦士や兵士や母になるはずの「子供」を確保させてくれるだろう。

『門』は、『それから』 「不倫」以後の男女を、決して「幸福」なものとしては書いていない。実際ひと頃二人の間に燃えていた「赤い炎」は「今では赤い色が日を経て昔の鮮やかさを失つてゐた。互いを焼き焦がした焰は、自然と変色して黒くなつてゐた。二人の生活はかようにして暗い中に沈んでゐた」(十四)とされるのである。

『門』が、そのような不幸 子供の不在や仕事上の挫折を「不倫」を犯してしまった夫婦に負わせていることはもっと注目されていい。テキストは、子供に関する不運や宗助の無能力を主人公たちにしかるべき「運命」と自覚させることで罪の意識を強制している。それは、親友を自殺させてしまった『ころ』の「先生」も静との間に子供がいないことを「天罰」と言っていたこととも照応するだろう。「日常性の裏に罪がある」(注22)というような、『門』における「罪意識」を当然視する考え方は、不倫を「罪」とするテキストの語りを補強してきたものにほかならない。

『門』は、『それから』が指向した逸脱を、秩序へと戻そうとしている。罪意識に怯えつつ、経済的にも恵まれず子供にも恵まれない不倫夫婦の生活は人々に「不倫」の行く果てを見届けさせ、恐怖させ、やがては「不倫」を断念させ、断罪させるだろう。『門』が不倫を断罪しているのは、それが近代国民国家が志向した<秩序>に反するものだからである。前章で述べた、漱石の「社会秩序」への志向は、そのようなものだったのである。

## 注

1) 江藤淳「門 罪からの遁走」(『夏目漱石 決定版』、新潮社、1974・11)

2) すでに西垣勤が「二人の間の裂け目」(『門』、『国文学』十巻十号、後『漱石と白樺派』、有精堂、1990・6に所収)を、米田利昭が「(二人が)異なる時間を生きている」(「異空間へ 『門』」、『日本文学』三十三巻六号、1984・6、後『わたしの漱石』勁草書房、1990・8に所収)ことを、中山和子が二人の間の「コミュニケーションの不在」(『門』論 「一つの有機体」の神話の隠蔽するもの」(『国文学』平成6・1、臨時増刊号「夏目漱石の全小説を読む」)を指摘しており、本論は基本的にはそのような指摘の延長線上に試みられるものである。ただし、本稿のねらいは何がそのような結果をも

たらせ、かつそのようなことが何を志向してのものだったのかを明らかにすることにある。

3) たとえば、石原千秋が宗助の「立身出世への欲望」(「神経衰弱の記号学、(『漱石研究』第3号、1994・11)を指摘している。

4) 平岡敏夫「門の構造」(『漱石序説』、塙書房、1976・10)

5) 前田愛「山の手の奥」(『都市空間のなかの文学』、筑摩書房、1982・12)

6) 石原千秋も御米が「利潤としての子供という考え方」をしていると指摘している。(「<家>の不在」、『日本の文学』八集、有精堂、1990・12)

7) 「近代家族」に関しては、落合恵美子「近代家族をめぐる言説」(『岩波講座 現代社会学第19巻<家族>の社会学』、1996・10)ほか参照。落合は八つの項目をあげているが、そのなかには「子供中心主義」「核家族」の項が設けられている。

8) 注5に同じ。

9) 注5に同じ。

10) 樋口清之『日本女性の生活史』223 - 224頁(講談社学術文庫、1977・4)。

なお、小森陽一・五味淵典嗣・内藤千珠子注釈『漱石文学全注釈9 門』(若草書房、2001・3)も、お米が「居場所を失いつつある」とし、「お米が覚える身体の苦痛」を指摘している。

11) 酒井英行「『門』の構造」(『日本文学』二十九巻九号、1980・9、後『漱石 その陰影』に所収、有精堂、1990・4)

12) アン・オークレー『主婦の誕生』150頁(岡島茅花訳、三省堂、1986・5)

13) 石原千秋も注5の論文で御米の「微笑」に注目しているが、宗助を「子供」と見て御米の微笑を「母」のものともみなしている。

14) 浅井美智子「近代家族幻想からの解放をめざして」(江原由美子編『フェミニズム論争』、勁草書房、1990・1)。また、前掲『漱石文学全注釈9 門』は「子供がいない責任は妻である女性の側に帰着する」として「子供に関する宗助の無頓着」を指摘しているが、「無意識のうちの悪意が語り手によってあらわにされ」(191頁)ているとして、作者による宗助の批判があったと考えているようである点で本論とは異なっている。

15) 上野千鶴子『家父長制と資本制』(岩波書店、1990・10)

16) 牟田和恵も明治三十年代に「よき母親であることが女性一般の性役割として強調されるようになった」こと、女性の政治的権利を求める根拠が「国民となるべき男子の母であり妻であるという性役割におかれていた」と指摘している(『戦略としての家族』新曜社、

1996・7)。

17) 注15に同じ。

18) 注15に同じ。

19) 米田佐代子「主婦と職業婦人」(網野善彦ほか編『岩波講座 日本通史18巻 近代3』、1994・7)

20) 注15に同じ。

21) アリエス『性と愛の歴史』(黄金枝、1996、韓国語訳文献)。

22) 越智治雄「門」(『共立女子大学短期大学紀要』1965・12、後『漱石私論』(角川書店、1971・6)所収)。なお、柄谷行人による「天罰」説も(「門について」新潮文庫解説。1978)同様の視点と言えるだろう。